

シリーズ 私の一冊の本

食品栄養科学部 小林公子 先生

夏目漱石 著

『 ころろ 』

閲覧室 1F 913.6 | N 58 角川文庫 ほか

「私の一冊の本」というタイトルで原稿を書くにあたり、どの本を紹介しようかと悩んでいた私は、何年か前の高校生との座談会の席で、高校生から「先生は高校時代にどのような本を読みましたか？」と質問され、「夏目漱石」と答えたことを思い出しました。高校時代、夏目漱石に惹かれ、「坊ちゃん」「草枕」「三四郎」「道草」「それから」「門」「ころろ」・・・と漱石の作品ばかりを読んでいた時期がありました。その中でも「ころろ」は特に印象深く記憶に残っています。そこで、この年末年始の休暇中に「ころろ」を読み返してみました。折しも、昨年は漱石没後 100 年、そして今年が漱石生誕 150 年の節目の年であり、漱石の作品や生涯が様々な場でクローズアップされ、さらには AI（人工知能）の技術を使った「漱石アンドロイド」が誕生したことがメディアで紹介されていました。100 年という時間を越えて、また、日本だけではなく世界の多くの人々に漱石文学は読み継がれています。漱石が没した年齢をすでに越えてしまった私が、今さら「ころろ」を読んだ感想をここに書くのも気恥ずかしく、また、うまく言葉で表せそうにはないのですが、読み終えた後はやはり胸が熱くなりました。高校生だった自分が、漱石の作品のどこに魅力を感じながら読んでいたのか、今となっては思い出すことができません。「ころろ」以外の漱石の作品についても読み返してみたいと思っています。

さて、私は「人類遺伝学」を専門としているのですが、日本で初めて「遺伝」という言葉を使ったのは、漱石だといわれています。漱石は、当時遺伝学研究が盛んであったロンドン大学に留学しており、帰国して間もない 1906 年に「趣味の遺伝」という短編小説を書いています。この小説の主人公である「余」の友人がある女性に一目惚れをするのですが、「余」は「先祖の恋愛感情がその子孫に遺伝するのではないか」という説をたて、二人の祖父母が恋仲であったということ突き止めるという話が軸になっています。文中に「元来、余は、医者でも生物学者でもなく遺伝という問題に関しての知識はないが、遺伝は余の好奇心を挑発するので、メンデルイズムやワイスマン等の遺伝理論を調べてみた・・・」というくだりがあります。当時の漱石も遺伝学に興味・関心を持ち、現在の遺伝学のトピックスのひとつである、メンデルの法則では説明できない新しい遺伝学「エピジェネティクス」の出現をはからずも予知していたのかもしれませんが、「あっぱれ夏目漱石」と思わずにはられません。